
フェンリスタの時計塔

しかはや緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェンリスタの時計塔

【コード】

N8588Z

【作者名】

しかはや緒

【あらすじ】

かつてにぎわっていたが、今は廃れた帝都フェンリスタ。ここにはあるひとつの恋物語がある。――さあ、時計塔へ向かおう。

(前書き)

初の短編です!!!

寛大な心でお読みください…… W W W

廃れた帝都フェンリスタにて。

この白い欠片を見ながら、君を思う。

白く白くわたしの記憶へと積もっていく。

あなたの思い出まで白く塗りつぶしてしまいそうで、少し怖い。

踏みしめる雪がきしり、きしりとなる。

ゴーン、ゴーン、ゴーン……………。

もう誰もいないはずで、ならないはずの時計塔なのに。時を告げ
たね。

わたしのために、あなたを呼んでくれているのかな？

もう一度会いたいね。手を伸ばせば、届くかな。

##

むかし、こんな話を聞いた。

あるところに、幼馴染の少年と少女がおりました。

二人はたいそう仲がよく、いつもいつも一緒にいました。

少女が十六になったとき、彼女に婚約の話が持ち上がり、本人は嫌がりましたが少年と一緒にいることはかなわなくなってしまいました。

4

「どうして。わたしは彼と一緒にいたいのに」

にぎわう街中を駆け抜け、彼女は時計塔へと向かいます。
幼いとき、彼とある約束をした場所。

暖炉で暖まった体は冬空ですっかり冷たくなり、少女は白い息を吐き、顔を赤くさせながらもなお走りました。

時計塔へ着いたとき。

そこには人影がありません。

もしやと思って目を凝らしてみると、なんとそれは彼でした。

「約束、覚えていてくれたんだね」

ずっと一緒にいようね

手をつなぎあって笑いあったあの日。あの時とはもう色々変わってしまったけど、二人の笑顔は変わることはありませんでした。

いつの間にか雪が降り始め、その瞬間

ゴーン、ゴーン、ゴーン……………

その鐘の音はまるで、二人を祝福しているようでした。

きゅっと二人は互いを暖めあうように抱き合いました。

少女の瞳は涙でぬれていましたが、少年は気づかないフリをしました。

二人は時計台から、きゅと一番美しい景色を見ました。

唇が重なり合うとき、いっそう鐘が大きく鳴り響きます。

きみに、

ここで永遠の愛を誓おう。

あなたに、

それからその二人がどうなったのかは誰も知りません。

ただその帝都フェンリスタの時計台へ行けば、真実の愛に出会える、と時を越えて語り継がれています。

###

もう地図からは消えた フェンリスタ 。わたしは今そこにいる。

こつ、こつと自分が階段を上る音だけが鳴り響く。手はすっかりかじかんで、吐く息は空気を白く染めた。

一番上まで上りきったとき。

自分以外の人影が、見えた。

愛しい、思い焦がれたその姿。思わず頬を涙が伝う。

ゴーン、ゴーン、ゴーン……………

待って待って、本当にずっと待った。

降り積もったこの思い。

やっと、会えたね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8588z/>

フェンリスタの時計塔

2011年12月27日00時52分発行